

後だと記憶している。祭壇は多くの方たちにおくっていただいた美しい花でいっぱいだった。

母のお通夜と告別式が終わる頃、新型コロナウイルスの蔓延による緊急事態宣言が発令され、世の中が一段と騒々しくなった。医療関係の仕事が長かった私は医療の現場が気になる。海外では、積極的にPCR検査を実施して、感染者を隔離する政策をとっていたが、日本では既得権益が先に立って抑制されているように見えた。国民の健康と命をどうやって守るのか。イギリスやフランスなどは日本よりはるかに自由と民主主義が進んだ国だ。その国でもロックダウンを行った。新型コロナウイルス感染症から国民の健康と命を守るためだ。猿真似の自由と民主主義の日本では、何が一番大切なかを知らない。特にメディアには失望した。まるで大本営の発表だ。

東日本大震災の時の報道を思い出す。国民の知る権利を守るのはメディアの大きな役割のはずだ。北海道の鈴木知事や大阪府の吉村知事の言葉が、聞く者のところに響くのは何故か。安倍首相の言葉が、伝わらないのは何故か。話し方や演出が上手い下手ではない。本気度だ。「日本は新型コロナウイルスによ

る死者が他の国と比べると極端に少ないからよくやっている」と言う人たちがいる。あなたの妻が、子どもが、親が、兄弟が新型コロナウイルスに感染して亡くなったらそんなことを言えるのか。命の重みを知る人、ヒューマニズムのこころを持っている人の言葉が、聞く人のこころに共鳴する。

生あるものは死ぬ。親から子へ、子から孫へと変わり行くのがこの世の無常の世界。社会も同じだ。今後、新型コロナウイルスなどの感染症との共生社会が求められる。働き方や教育、生活スタイルも変わるだろう。あらゆるものが変化する。戦後75年が過ぎた。この危機管理の貧しい日本の政治体制も変わる時が来たのではないか。「アベノマスク」に400億円をかけて1世帯2枚のマスクを配るという。こんな愚策がまかり通る国に失望した国民は多いはずだ。緊急事態宣言で休業を余儀なくされた経営者や従業員は数知れない。今日の生活、明日の生活にも困り、感染症で亡くなるのではなくて、貧困で命を落とす人がいる。にもかかわらず感染症対策や経済対策の不備は目に余るものがある。

今後、倒産する企業や失業者が多く出るだろう。学業の継続や就職、将来が見えない不

新型コロナウイルスによって 露見したこと



新型コロナウイルスによる影響が社会を渦巻いている。緊急事態宣言を受け、不要不急の外出自粛や施設の使用制限要請となり、人の暮らしの基本である労働と消費の循環は分断された。その結果4～6月のGDP（国内総生産）は戦後最悪の前年度比マイナス25%と予想されている。多くの人の家計がひっ迫し、失業、倒産、賃料滞納など、不安の増大は止まらない。国からの支援は対応が遅く、「雇用調整助成金」をはじめ多くの制度はあるものの使いにくい仕組みのままである。感染の危険も、生活の不安も、人生も先が見えない暗闇に囚われている。不安を払拭すべき社会保障分野でも介護、医療が危険に晒されており、当たり前の社会基盤が崩壊の危機に瀕している。

介護はもともと「3密」で感染リスクが非常に高い。それでも厚生労働省の指針にしたがって感染予防対策をする中で、事業を継続しなければならないのが現状だ。いつ感染す

安と失望の渦巻く社会が到来するかも知れない。その負のエネルギーを政治に向けて欲しい。若い人に期待する。既存の政党や国会議員ではなく、自分たち自身で立ち上がることができはすだ。新型コロナウイルス感染症は新しい社会の夜明けになるかも知れない。そうなつて欲しいと願う。

るのか分からない不安やもうすでに感染しているのではないかと疑念を持ちながら、それでも利用者に寄り添う職員の心配とストレスは限界に近い。また人手についてはもともと不足している上に、保育園や学校の休園・休校で出勤できない職員や介護施設が休業になり親の介護を担わなければならないとなった職員、感染の不安で出勤を取りやめる職員などが続出している。人手不足でも介護は崩壊の一手手前である。

それでも、介護は「インフラ」として無くてはならない職業だとコロナ問題を契機に社会は気づいたはずだ。しかし、社会における介護の必要性は認識されたものの、その重要性や価値に対する理解は未だ不十分で実態を伴っていないという課題もある。それは介護業界全体で認識する必要がある課題であろうが、介護サービスは単に人々の生存を支えているばかりでなく、一人ひとりの人生と生活のちと尊厳をも支えているということが伝わっていないのではないだろうか。

新型コロナウイルスであらわになった社会不安は、実はその多くが社会構造にあると言われている。経済至上主義によって、医療や看護、介護や教育といった人の根幹を支える



Sasaki Honoo

ポスト新型 コロナウイルスの ケア社会を 目指して

◆◆◆
NPO法人ホッとスペース中原代表
牧師

佐々木 炎

仕事は顧みられずにきた。社会不安を払しょくしていくためには、そうした人と人を支える仕事に、より一層の配分を行う必要があることは誰の目にも明らかである。だが、政府はコロナ収束後に今の社会構造を変える気がないようだ。その一端が『GOTOキャンペーン』という補正予算に現われている。2万円分のホテル宿泊費のクーポンや、レストランやイベントチケットなどの20%オフなど観光やイベント、飲食業などへの支援を目的とした経済対策費で、その予算は約1兆6000億円を越えると言う。これに対して、医療に関する予算は約6600億円である。介護は第二次補正予算でやっと組み込まれたことを考えると、介護軽視の現実が透けて見える。だが、介護という困難を共に乗り越えていこうとする人間の営みに目を向けるとき、かすかではあるが「ポストコロナ」の萌芽を見ることが出来る。

現場で見えてきた これからの介護



新型コロナウイルス対策の最中の介護をして気づくことが多くあると思う。例えば外出自粛によって行動を制限されたことで、「自由」がどんなに大切かを実感しているのではないだろうか。私たちは認知症ケアの「スピーチロック」をされる不自由さや施設に閉じ込められる体感をして、初めて「自由」を制限することの侵害性に気づく。また、コロナで先行きが見えない不安を体験することで、「自分の置かれている状況をコントロールできず、予測や状況の把握ができないことはどういうことか」を身をもって感じてみている。これは、認知症でいえば見当識障がいや混乱と重なるし、要介護者が老いと病を抱えて先行きの不安を抱えていることも重なる。死の恐怖は「いのちよりも大切なものはない」とを否応なしに突き付けている。お金も大切だが、いのちがあつてのことだ。

私たちは新型コロナウイルスによって無意識のうちにたくさんの気づきを得ている。改

めて社会で希薄になっている「人は誰もが能力によらず掛け替えのない存在であり、失い見捨ててはならない」という福祉の根幹を深く自覚する。私たちはそうした気づきを得ながら今日も介護を続けているが、その小さなケアの積み重ねこそ社会の有り様を『進化』(evolution)させ、変えていく「ソーシャルアクション」のチャンスになると改めて感じる。

『介護の本質』という素晴らしい営みは現代社会に必要不可欠であり、社会が忘れてはならない真理であることを、「コロナの痛み」を通して教えられている。つまり、介護は私たちの社会と離れたものではなく、介護の中にこそ社会の縮図があり、社会の問題や歪みが介護を通して露わになっている。

ポストコロナ



来年度(2021年度)に介護報酬改定を控えているが、2024年では大きな変更があると言われている。このままでは財政難を

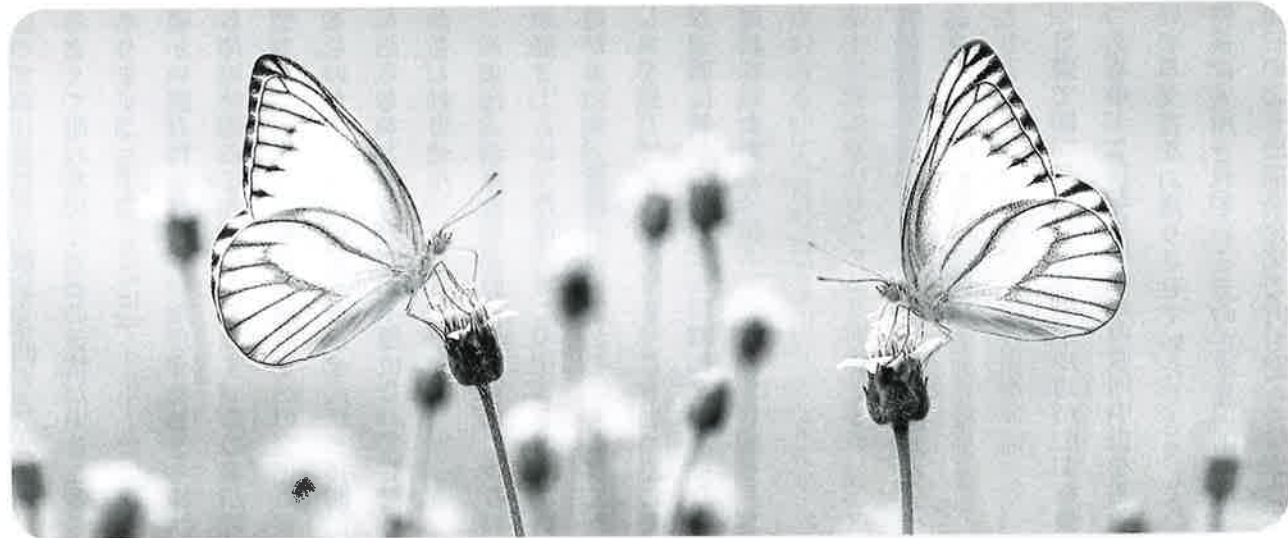
理由にますます介護の環境が悪化するの確実だ。激動のオオスのなかで、介護は何を羅針盤として進めばいいのか。それは、今こそ『地域共生社会』(地域包括システム)であり、その先にある人と人が相互に助け合う『連帯』であろう。今回、新型コロナウイルスの災難で人類が改めて強く自覚したことだ。

私たちも職場で自分の弱さや困りごと、ストレスを分かち合うようになった。そこから助け合いの心が育っている。不安や恐れ、先行きが不安なときは誰かの存在とつながりの「場」が必要であるということを、改めて教えられた。共感や理解という概念が言葉ではなく実感として広がっている。これまでの社会は、自己責任が強調され、差別、排除、区別、競争などで形作られていた。しかし、今は他者への思いやりや心配り、そして『愛』という「ケア」が社会に広がっていると思いたい。人類がこのことを「英知」として蓄積できたら素晴らしい財産になるだろう。この必要が小さな介護福祉の世界だけではなく、社会や国を越え、地球規模で希求されている。その原動力は介護にあり、今まさにその力が発揮されることを時代は待っている。

だから今、介護や福祉に携わる全ての人が

新型コロナウイルスの感染予防を最大限に行いつつ、終息後にあるべき『介護福祉』と『社会の有り方』を描きながら目の前の利用者に向き合おう。そうでなければ社会も、介護も生き延びられない。私たちは今、ポストコロナ、そしてポストモダンの歴史の分水嶺に立っているのだ。

『人と人とのあいだで営まれるさまざまな関係こそ、人間に真の幸福をもたらす主要な、おそらくは唯一の源泉と考えられるからである。その逆もいえる。すなわち貧しい人間関係こそ、人に不幸をもたらすものとも重要な唯一の源泉である』(『ケースワークの原則』バイステイック著)



実践を通して 生まれる、 新しい言葉とは

◆◆◆ NPO法人ほっとポット

佐々木 愛

Sasaki Ai



20代の未熟な福祉職である私が、こうした媒体でなにかを語るといふ行為にはどのような意味があるのか。そう考えてみると、意義を見出せる自信はない。意義を見出すことはこれを読む方々に任せて、私は自分が活動する場所から見える景色について、今回は特に高齢者の方々とかかわりの中で生まれる「あれこれ」を書き起こしてみたい。そしてそのあれこれを経たうえで思うところを少しだけ語ろうと思う。その前提としてまずは私がどのような場所にいるのかを説明するところから始めよう。

私が働いている法人は、さいたま市内で小規模巡回型の『無料低額宿泊所』を運営している。無料低額宿泊所は社会福祉法第2条3項8号にもとづいて「生計困難者のために、無料または低額な料金で簡易住宅を貸し付け、または宿泊所その他の施設を利用させる事業」だ。これは第2種社会福祉事業として位置づけられる。ただしその内実については、多くの施設が生活への支援を何らかの形で提供しており、単に一時的な居住の場所のみを提供しているわけではないので注意が必要だ。厚生労働省が全国の無料低額宿泊所を対象に平成30年に行った調査では、全国に

570施設が存在し、入居者は1万7067人となっている。また、入居者の中で生活保護制度を利用している者は1万5457人。高齢の方々に注目してみると、65歳〜75歳未満の方が5617人で全体の32・9%、75歳以上の方が1915人で全体の11・2%を占めている。また65歳以上の入居者の9割超は生活保護受給者となっている。以上が無料定額宿泊所という社会福祉施設の概況だ。住まいを失った、または失いそうになって無料低額宿泊所にたどり着いた方々の中には、貧困状態の高齢者が多く含まれているのだ。

概況はここまでにとどめて、これ以降は私がかかわっている方々とのやりとりとそこから思うことを書き記す。登場するのはAさんBさんCさんという3名の方だ。

Aさんは東北地方の豪農の家に生まれ、大学を出たのちに上京して結婚。だが、子どもとの折り合いが悪くなり、最後は家を失うこととなった。それ以来、Aさんは長い時間を無料低額宿泊所で過ごしてきた。80歳を超えた現在の願いは「今いる施設で亡くなること」だ。だが無料低額宿泊所はあくまで一時的な住居として設定されている。その目的とAさんの意志は真つ向からぶつかる。Aさんはこ

う言う。「オレは施設や病院には行きたくない」と。そういう話を聞くと私はほとんど困ってしまふ。命にかかわる疾患を抱えながら頑なに医療や介護サービスの導入を拒み、一時的な住居で最後を迎えたいと訴える。そんな中で、解決の糸口を見出そうと私は以下のような提案をした。ここにいるためにも医療や介護サービスを導入してほしいという内容だった。すると、こんな返事が返ってきた。「元氣になったら病院に行くから」それはあまりに斬新な答えだった。

結局、私ができたことは生活の変化や体調の悪化をできるだけこまめに気にすることぐらいだった。そんなマイペースなAさんだったが、ある日突然体調が悪化した。息も絶え絶えといった状態のAさんは、それでも「元氣になったら病院に行くから、また来週きてくれ」と言う。拒否されたらどうしようと思いつながら、救急車を呼ぶ。ほどなく来た救急隊員を前に、Aさんは驚きの発言をした。「ありがとう、よろしくお願いします」。Aさんはあっさりと方針転換をしたのだった。数週間の入院を経て無事に施設に戻ってきたAさん。現在は訪問介護と訪問看護、訪問診療を利用して施設で暮らし続けている。

Bさんは70代の男性で北陸にある地方都市の出身。地元で遊び尽くした末に「大物になりたい」と上京。職を転々としつつ次第にお酒中心の生活になっていったという。アルコール依存症と診断を受けたあとは入退院を繰り返し、最後は退院後の住まいが見つからずに現在の施設へ入居することとなった。私が訪問するたびに、初恋や遠距離恋愛、道ならぬ恋まで波乱万丈の恋路を楽しそうに語ってくれる。兄弟や友人が多いという隣の市への引っ越しを数年来の目標に、介護保険の利用や通院の体制を整えながら体力維持に励んでいた。そして、元氣なうちに引っ越しをした。そして、元氣なうちに引っ越しをした。そして、元氣なうちに引っ越しをした。

何度も転居についてケースワーカーに訴えて、ようやく出てきた答えは「居宅生活は厳しい」というものだった。最も大きな理由は、通院している病院の担当医から認知機能の低下がみられるとの意見が出たためだという。Bさんは聴力が低下しており、たしかに話がかみ合わないことがあった。それが原因ではないかと思った私は、病院に認知機能が

低下しているという根拠を尋ねてみた。返ってきたのは「長谷川式認知症スケール」という検査での点数だった。数値、それは時として実際の生活の様子よりも確たる証拠や根拠となってしまう。それを聞いた本人もかなり落ち込んでいた。

その数週間後、病院から連絡が入った。前回の検査は少し前のものだったので、次の定期診察では念のためもう一度検査をしたいという内容だった。もう一度検査を受けて同じ結果を知るとは、Bさんにとって負担なのではないかと思つてBさんに率直に聞いてみた。「もう一度検査を受けるのは怖くないですか」。すると笑顔で「怖くはないですよ、オレさんさん好き勝手やって色々嫌な目にもあったから。今更検査でどうということはないよ」と言う。それならと再検査を後押しすることにした。1か月ほどして病院から電話があった。電話口で担当医は興奮していた。「驚きました。検査をしたら満点だったんです。担当医も驚いていました」。私の想定を超えた報告に苦笑い。いま、Bさんは新型コロナウイルス感染症の影響が収まったら引っ越しをしたいと準備を進めている。

Cさんは、数十年にわたって路上生活をしていた方だ。2月、3月の雪がちらつく日でも、部屋の窓を全開にして扇風機を回しながら、「今日は少し肌寒いね」と笑っている。もともと住んでいたのが大きな川の河川敷で、寒さや暑さは「この比ではない」。部屋の中には最低限のものしか置かず、新聞や図書館で借りてくるミステリー小説を読みながら暮らしている。

Cさんは「人付き合いが苦手」だと言う。私も関わり始めた当初は会話が続き、うまく関係を築けないのではないかと悩んだ。そんなCさんとの距離が縮まったのはゴルフボールのおかげだった。ある日突然、「これあげますよ」と1個のゴルフボールをくれた。思いもかけない贈り物に戸惑いつつ、モースの『贈与論』が頭をよぎった。これは単なる「プレゼント」なのか。すると戸惑っている私に語りだした。Cさんが以前住んでいた河川敷の「家」の近くにはゴルフの練習場があった。あらぬ方向に打たれて草むらに消えるゴルフボールが後を絶たない。Cさんはそれを回収することで現金収入を得ていたのだ。新品に近いゴルフボールを探して、草むらをかき分けながら探していたという。そんなこと

を思い出して、数日前に住んでいた河川敷まで行ってきたと言う。私にくれたのはその時に拾ったボールだった。

私はCさんの話を聞きながら、手元にあるゴルフボールを見た。ピカピカだった。Cさんにとって、ゴルフボールは生きていくために必要不可欠なモノだったのだ。ひとつのゴルフボールがとても重く感じられた。それ以来、Cさんはたくさんのお話をしてくれるようになった。あの時、ゴルフボールを受け取ったことが、職業人として正しかったのかは今も分からない。だがあの時を境に、支援する側とされる側のぎこちなさが消えたことは間違いない。

日本は2042年に高齢者数が3935万人となり超高齢社会のピークを迎えるという。全ての高齢者が自らの人生を最後まで主体的に選択できることは大切なことだ。主体的な選択とは、100人の人がいれば100通りの選択があることを意味する。これはとてもない難題だと思う。だが今も複雑に絡み合いつつ刻々と変化を続ける一人ひとりの生の在り方を前に、丁寧に未来をつくるための対応をしていくこと以外に、私たちは何が

できようか。右往左往することもひとつだとするならば、それをどのような言葉で意味づけていくべきなのか。今はまだ分からない。だが、ひとつはつきりと言えることは、単に「共生」などといった既存の言葉を用いるのではなく、実践を通して新しい言葉を紡ぎだすことこそ大事だと思う。若い私が自分の言葉で発信する意義もそこにある。

新型コロナウイルスの もたらした意味とは

新型コロナウイルスは、私たちの生きていく社会の中に大きな変化をもたらした。その甚大で、かつ広域的な被害は今後の日本における「持続可能な社会」への大きな警告である。

一つは感染予防という公衆衛生分野における「公共の福祉」の考え方が、今後の日本の「持続可能な社会」への第一の条件作りとなったということである。第二に、これは感染した人々の近隣や友人、馴染みの人間関係、家族関係など、全ての人々に関する過酷な試練であるということでもある。そういう意味では、これまでの曖昧な日本的な義理人情的な人間関係のその全てを明かするような行動パターンへの透明性をもたらしたとも言えよう。

そして第三は、近年のグローバル化による生産力の増大化は、確かに人間の生活を豊かにするが、果たして一人ひとりの個人としての人の力や自然の力を解放したかというところではなく、むしろ大量生産・大量消費の物質中心主義の文明によって、かえって新型コ

ロナウイルスの汚染を拡大させ、ニューヨークなどの大都市部における死者が増加したということは明らかであろう。

これらの諸課題をそのままに放置して、この問題の本質である今後の日本の「持続可能な社会」の実現化を見失ってしまうなら、それこそ、我々の子孫が明日にでもまた別な未知のウイルスに感染してしまうことになるであろう。

新型コロナウイルスの 発生について

地球の年齢は46億年、新型コロナウイルスなどのウイルスの年齢は30億年。ウイルスは自然界では人間（六〇〇万年〜七〇〇万年）よりはるかに大先輩である。従ってウイルスは、生物ではなく鉱物などの無生物とも言われている。しかし、ウイルスは増殖する点が鉱物などの無生物と違う点である。その大きさは、一万分の一ミリという小ささで、この地球上には三万種類のウイルスが存在する。人間や動物だけでなく昆虫や植物にも感染

新型コロナ ウイルス以後の 社会を考える

株式会社ヒューマン・

ヘルスケア・システム代表取締役

松井直樹

Matsui Naoki